

金剛峯寺 2 件の重要文化財（建造物）指定に係る資料

- 1 名称：^{こんごうぶじ}金剛峯寺 ^{とう}9 棟
^{みえどう}御影堂、^{さいとう}西塔、^{さんのういんはいでん}山王院拝殿、^{さんのういんしょうろう}山王院鐘楼、^{じゅんていどう}准胝堂、^{ほうぞう}宝蔵、^{だいえどう}大会堂、
^{あいぜんどう}愛染堂、^{さんまいどう}三昧堂

所在地：^{いとくんこうやちようおおあざこうやさん}和歌山県伊都郡高野町大字高野山 1 5 2 番地

所有者：宗教法人 金剛峯寺

概要

高野山は和歌山県北東部の山々に囲まれた盆地上に位置し、弘仁 7 年（816）に弘法大師空海によって真言密教の根本道場として開かれた、日本を代表する宗教的聖地の一つである。高野山全域が金剛峯寺の境内地であり、その中心となる伽藍は「壇上伽藍」と称され、墓域である奥之院とともに山内の二大聖域となり信仰を集めている。今回重要文化財に指定されることになった金剛峯寺 9 棟は、後述の金堂及び根本大塔とともに、壇上伽藍を構成する堂塔である。9 棟はいずれも幾度もの火災に見舞われながら復興を繰り返し、現存のものは江戸時代末期から明治時代前期にかけて再建された建造物となる。

壇上伽藍は東西に長く取られた敷地に、中心部南端に中門が建つ。中門をくぐると北に金堂、根本大塔や御影堂などが建ち並び伽藍の中核を成す。

御影堂は、金堂の北西に建つ弘法大師の御影を祀る仏堂で、奥之院^{おくのいん}御廟と並ぶ高野山の最聖域となる建造物である。嘉永元年（1848）に建設された緩やかな^{ひわだ}桧皮葺き屋根の優美な仏堂で、多くの飾金具や漆^{うるし}を用いて荘厳され、桧の良材を駆使し優れた意匠でまとめた極めて質の高い建造物になる。

西塔は根本大塔と対をなす壇上伽藍の北西に建つ塔で、天保 5 年（1834）に再建された。国内有数の規模を誇る大型の五間^{ごけん}多宝塔で、屋根は瓦型銅板葺きとし内陣は華麗に^{さいしき}彩色されている。

山王院は壇上伽藍の西端に位置し、地主神である高野明神や丹生明神を本殿に祀る。その本殿を礼拝するための山王院拝殿や山王院鐘楼のほか、伽藍に建ち並ぶ准胝堂、大会堂、愛染堂、三昧堂の諸堂も、桧皮葺き屋根で高野山の伝統形式を継承するとともに意匠も優れた建造物群になる。

宝蔵は御影堂の北側に建つ寺宝を収蔵する蔵で、御影堂と同時期に建設された。土蔵造、漆喰塗り、銅板葺き屋根で、桧の良材を用いた蔵である。

上記の建造物のほか関連する^{むなふだ}図面や^{つけたり}棟札が附指定となり併せて保護が図られる。

これら金剛峯寺 9 棟は、近世末期の成熟した寺院建設技術のもと高野山の中心伽藍にふさわしい格式を備えた建造物群として再興されたものであり、高い歴史的価値を有するとともに長い歴史を誇る伽藍の往時の姿を良く伝えている。

金剛峯寺 9棟



御影堂



西塔



山王院拝殿



山王院鐘楼



准胝堂



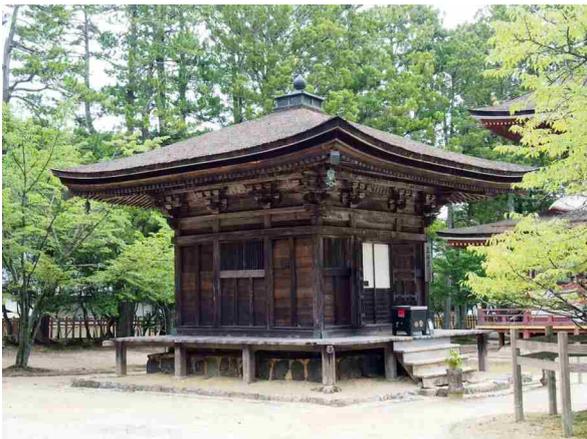
宝蔵



大会堂



愛染堂



三昧堂

2 名称：^{こんごうぶじこんどう}金剛峯寺^{こんほんだいとう}金堂及び^{とう}根本大塔 2棟
金堂、根本大塔

所在地：和歌山県伊都郡高野町大字高野山152番地

所有者：宗教法人 金剛峯寺

概要

金剛峯寺金堂及び根本大塔は、前述の金剛峯寺9棟とともに、壇上伽藍に建つ主要な堂塔である。このうち金堂は、高野山一山の総本堂として使われてきた建造物で、現在に至るまで高野山の重要な行事が修されている。幾度もの火災に見舞われながら建て直されてきたもので、現存する金堂は昭和7年（1932）の再建である。根本大塔は、真言密教世界を具現する高野山の象徴となる大塔で、金堂同様に何度かの焼失の後、現在の根本大塔は昭和12年（1937）に再建された。

金堂及び根本大塔の再建は、昭和9年（1934）の弘法大師千百年御遠忌^{ごおんき}を記念した主要事業の一つであった。設計は京都帝国大学の建築家・武田五一^{たけだごいち}（1872－1938）と同大学の建築史家・天沼俊一^{あまぬましゅんいち}（1876－1947）によるもので、意匠は伝統形式にのっとりながらも、耐震・耐火性能の獲得も目標とされた。そのため、鉄骨鉄筋コンクリート造と木造の混構造が採用されている点に特徴があり、当時最新の建設技術のもとに建設された。

金堂は間口30m、奥行24mの大型の仏堂で、屋根は瓦型銅板葺きである。鉄筋コンクリート造の構造体に木材を貼り付け、あたかも純木造のように見せて造られている。内部は中央に漆塗り板敷きの内陣を取り、周囲に畳敷きの外陣がめぐる。内陣は天井の高い壮麗な空間となり、高野山の総本堂たる高い格式を示す。

根本大塔は間口23m、高さ48mの五間多宝塔で、屋根は瓦型銅板葺きである。下層は四角形平面、上層は円形平面に造り、下層の中央に丸柱で囲まれた八角形の仏壇を設え、大日如来を祀る。外まわりは全て木造とし、伝統的工法によって造られているが、主体部は鉄骨鉄筋コンクリート造として、構造上木造の部分はこれに寄り添うように構成される。これには先行した金堂の建設技術が活かされている。金堂は天沼により古代や中世寺院の細部様式が引用され創作的な意匠で設計されたが、これと異なり根本大塔は礎石や文献調査により史実に基づく「復元」を目指した点に特徴がある。戦後に各地で寺院や城郭が復元されるが、その先駆的な例となる。

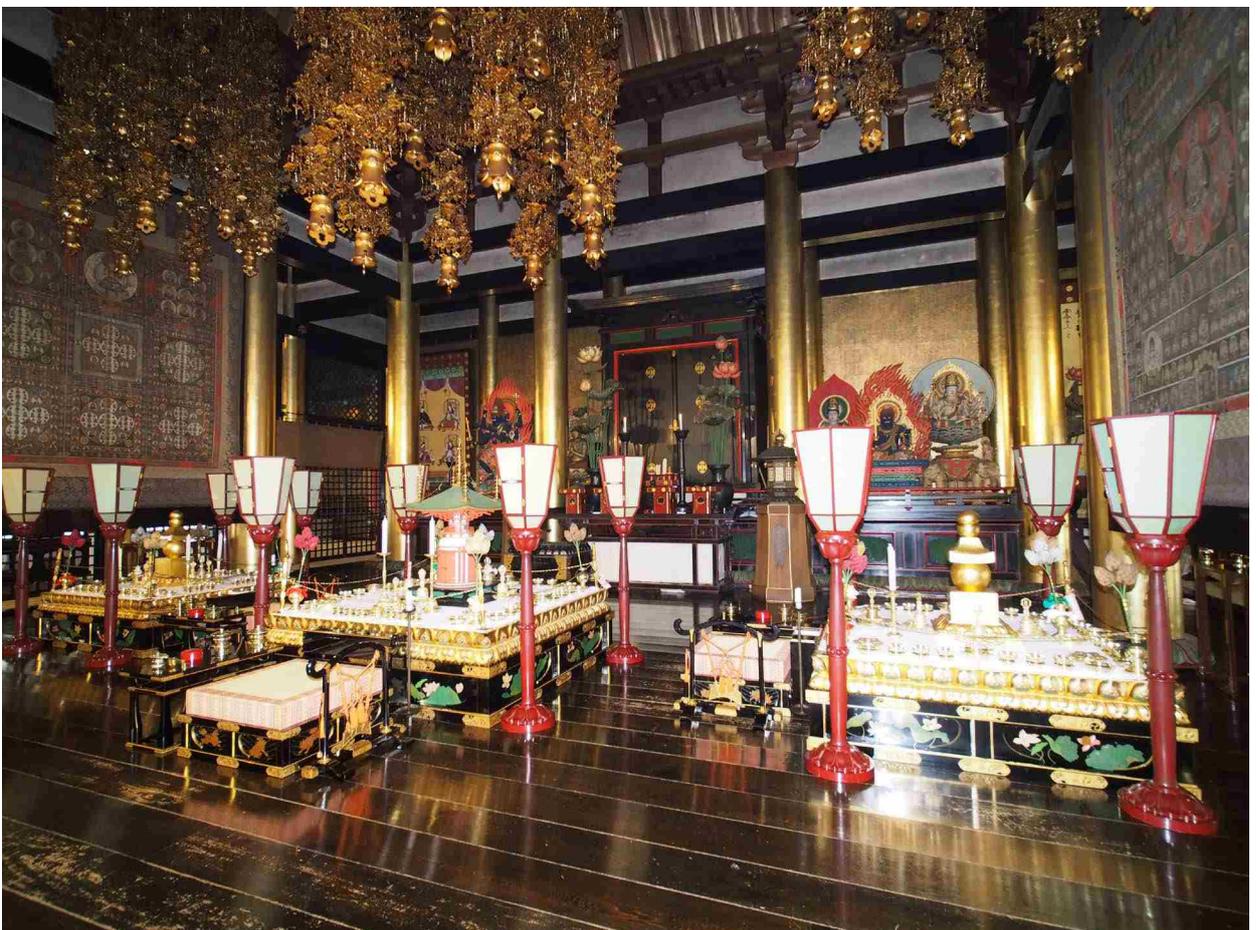
上記2棟の建造物のほか、関連する図面や棟札が附指定となり併せて保護が図られる。

金剛峯寺金堂及び根本大塔は昭和前期に建設された鉄骨鉄筋コンクリート造と木造の混構造の堂塔である。日本近代における大型寺院建築の到達点の一つを示す建造物として高い歴史的価値を有している。

金剛峯寺金堂及び根本大塔 2棟



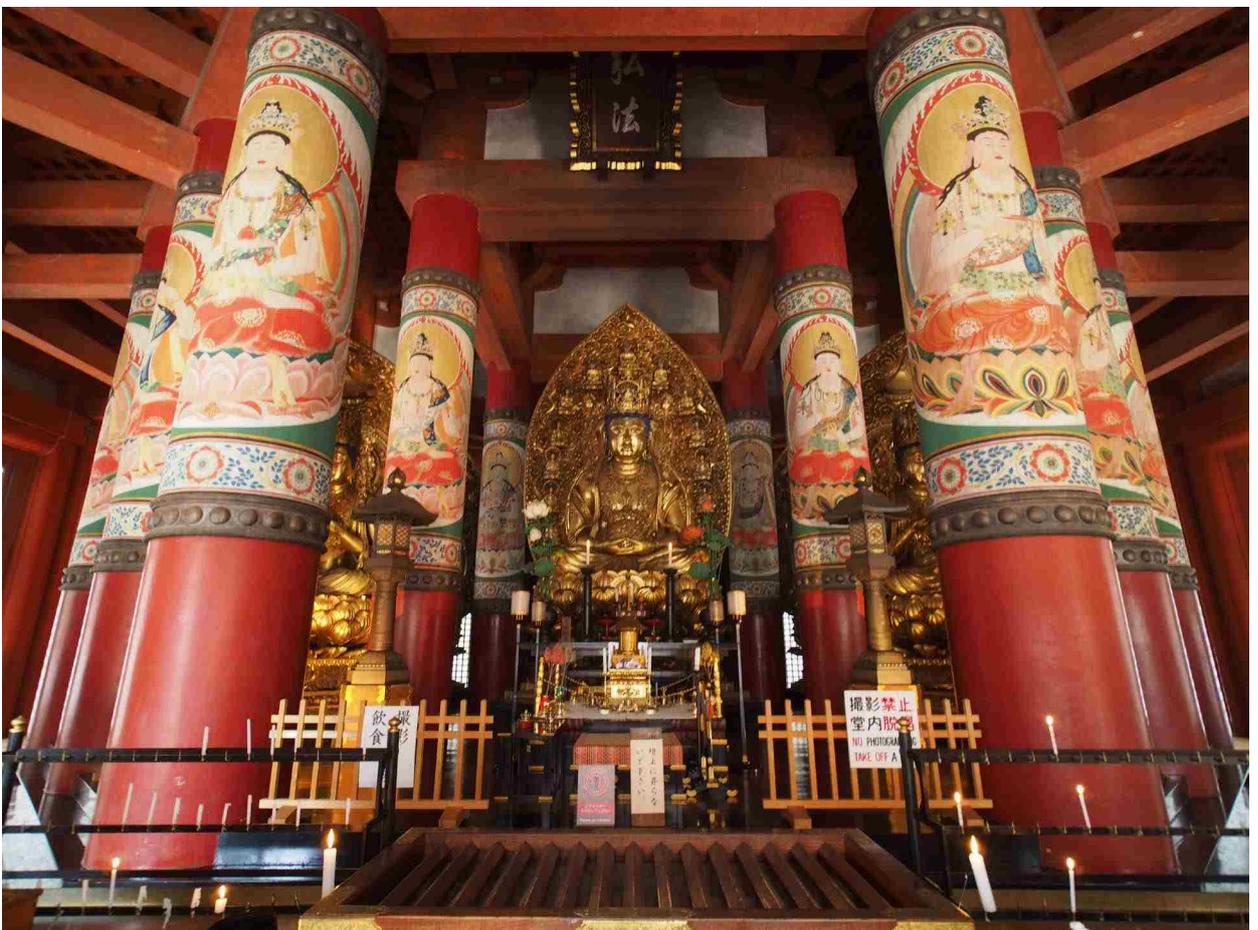
金堂 正面外観



金堂 内陣



根本大塔 正面外観



根本大塔 内部